

国際ロータリー第2560地区
ガバナーテーマ

「クラブと地区の
変革をめざそう」

高田ロータリー今年の
スローガン

「しなやかな変化で
奉仕を高めましょう」



ロータリー：
変化をもたらす

2017～2018年度

国際ロータリー会長 イアンH.S.ライズリー

2560地区ガバナー 新保 清久

高田ロータリー会長 橋詰 敏一

幹事 田中 正人

事務局：新潟県上越市西城町2-10-25 大島ビル201号

TEL (025) 526-3288 FAX (025) 526-3534

メールアドレス：takadarc@joetsu.ne.jp

例会場：デュオ・セレッソ TEL (025) 526-3111

クラブ広報・会報・雑誌委員

箕輪 賢一 堀井 靖功 渡邊 隆 山田 守

小池 猛紀

第38回例会 ■ 4月20日(金)

No.38

直々前会長挨拶 ● 水上 喜芳



皆さんこんにちは

本日の例会は、橋詰会長、本山直前会長ともに都合が悪く前々会長の私に回ってきました。代わってご挨拶申し上げます。

先週の例会は当クラブの観桜会でした。今年は、桜の開花が全国的に大変早く、ここ高田公園においても例年より1週間早く咲き始めました。咲き始めは早くても開花時期が長ければよいのですが早く咲けば、散るのも早いということで中々思うようになりません。私事ですが、来週23日から26日まで東北地方の桜を見て回りたいと思っています。福島県の三春の滝桜、花見山公園、仙台市の青葉城公園、岩手県の北上展勝地、盛岡の石割桜、NHKの朝ドラになった小岩井農場の一本桜そして最後は秋田県角館の枝垂れ桜と開花時期を調べ回る予定にしています。ここ15年毎年訪れていますが今年はたぶん何処も、散ってしまっているのではないかと考えています。

さて、橋詰年度も残すところ2ヶ月余り、第四コーナに差し掛かると言うところですがロータリーの第4コーナは当年度事業と次年度の準備で大変忙しい時期になります。また、地区では先月末PETSも終わり、川瀬年度の行事がスタート

しました。併せて、大谷年度の第1回スタッフ会議が先月末3月31日行われ、こちらも、いよいよ準備開始となりました。その様なことで大変忙しい時期になりますが皆様の、ご協力よろしくお願い申し上げます。

本日の卓話は、上越教育大学副学長の小埜先生から、ご講話を頂きます。

出席報告

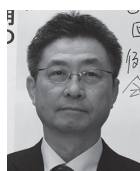
出席率 98.15%

メイクアップ

高坂光一君 (4/19 越後春日山 RC)

セレモニー

入会式



木村 隆君(新潟日報社 上越支社長)

委員会報告

親睦委員会——4月の会員お誕生日各お祝い

社会奉仕委員会——4/30 上越市みどりのフェスティバル参加のご案内

幹 事 報 告

配布物：週報No.36・37

回 覧：上越市みどりのフェスティバルチラシ(社会奉仕委員会)

報 告：本日の卓話取材について(上越タイムス社)

5月例会プログラム

回	日	講演者：演題	会 場
—	5月4日	法定祝祭日：休会日	—
40	5月11日	会員卓話 未定	デュオ・セレッソ
41	5月18日	卓話 高田ローターアクトクラブ 会長 細野 春貴君	デュオ・セレッソ
42	5月25日	クラブ協議会 地区研修・協議会報告	デュオ・セレッソ

卓 話 小川未明の研究と顕彰活動について

国立大学法人上越教育大学 副学長 小埜 裕二 様



本日は、上越教育大学副学長の小埜裕二様より、郷土の作家小川未明に関する研究と顕彰の活動状況と今後の取り組みについて卓話をいただきました。

近年、日本の有数の大学で未明研究が行われていること、またその研究成果が小川未明文学館の秋の文学館講座で紹介されること等のお話がありました。また近隣小学校の生徒のために作成された小川未明クイズの披露もありました。

今年の課題として、未明フェスティバル(11月23日)の企画を任せられていること、その催しにおいて未明童話の朗読やフラメンコの創作舞踏、新作合唱曲の披露、読書感想文コンクール表彰式、未明新作グッズの披露を計画していることなどのお話もありました。

地域と密に連携しながら今後も顕彰活動を続けていきたいとのことでした。

未明文学に触れる

未明の海



郷土海岸

小川未明は、運命に立ち向かう終わりなき闘いを人生の課題としました。「雲」は変幻自在なものとして、未明をその闘いに向かわせるシンボルとなりました。「雲」の形象と対比的に登場するもう一つのシンボルが「海」です。

「日本海」(明治39年(1906))という小説では、陸と海の闘いという表現をとりながら、そこに人の一生と悠久の自然、有限と無限、生と死の対比を重ねあわせています。「海」は、「永久に、沈黙するシンボル」として、命のはかなさを人間に知らせる存在として登場します。

「大きな蟹」のおじいさんが、海で大きな蟹を背負って帰ってきた背景には、この海が存在があります。人はどこから来てどこへ行くのか。海はそれを知っています。無に帰るのだ、というわけです。

未明にとって、海のある北は特別な方角でした。自然と人間の対比を、天と地の上下関係から捉えるだけでなく、南北の方位関係から捉えたことで未明文学は推進力をえました。イマジネーションの源泉が北にあり、そこから力が供給されることで未明文学は成長しました。東京にあって北は特別な方角でした。海は、人間の意志を越えた、大きな力、運命の存在を意識させる源泉として未明文学に登場します。

文・小埜裕二氏(上越教育大学副学長・教授/小川未明文学館専門指導員)
©上越タイムス社「小川未明に親しむ」平成29年(2017)6月11日掲載

未明文学に触れる

未明の雲

小川未明が若き日に移り住んだ春日山の神社境内に、未明が晩年に記した詩碑(昭和31年(1956))が建てられています。

雲の如く 高く
くものごとく かがやき
雲のごとく とらわれず



春日山神社

未明の高い志、情熱、信念のほどがよく表された詩行です。未明が「雲」に託した種々の意味を整理すると、「雲」に無常の思いを重ねていたことが分かります。命のはかなさ、運命に抗えない思いは、くびき平野の、静かな城下町に育った未明が、悠久の自然と人間の一生の短さを対比させるなかで学んだものです。

しかし、未明はそれゆえにこそ、自分の命を限りある人生の中で燃え上がらせようとした。「雲」には、行雲流水という言葉があるように、変幻自在の自由さもあります。未明は自由な「雲」に生き方の理想を求めました。どうすれば人間は生の真実に触れ、幸せに生きられるのか。その誠実な追究の軌跡が未明文学から読み取れます。

道遠くして日は傾けり 独り草原に
座して 火雲の乱舞を見る



未明の詩碑(春日山神社境内)
写真は没後50年式典時のもの

未明は晩年にもう一度、「雲」を登場させます。最後の息を吐きつくすまで本当の生活をこの地上で営みたい。雲の如く、高く、くものごとく かがやき、雲のごとく とらわれず——。そう願った作家でした。

文・小埜裕二氏(上越教育大学副学長・教授/小川未明文学館専門指導員)
©上越タイムス社「小川未明に親しむ」平成29年(2017)4月2日掲載